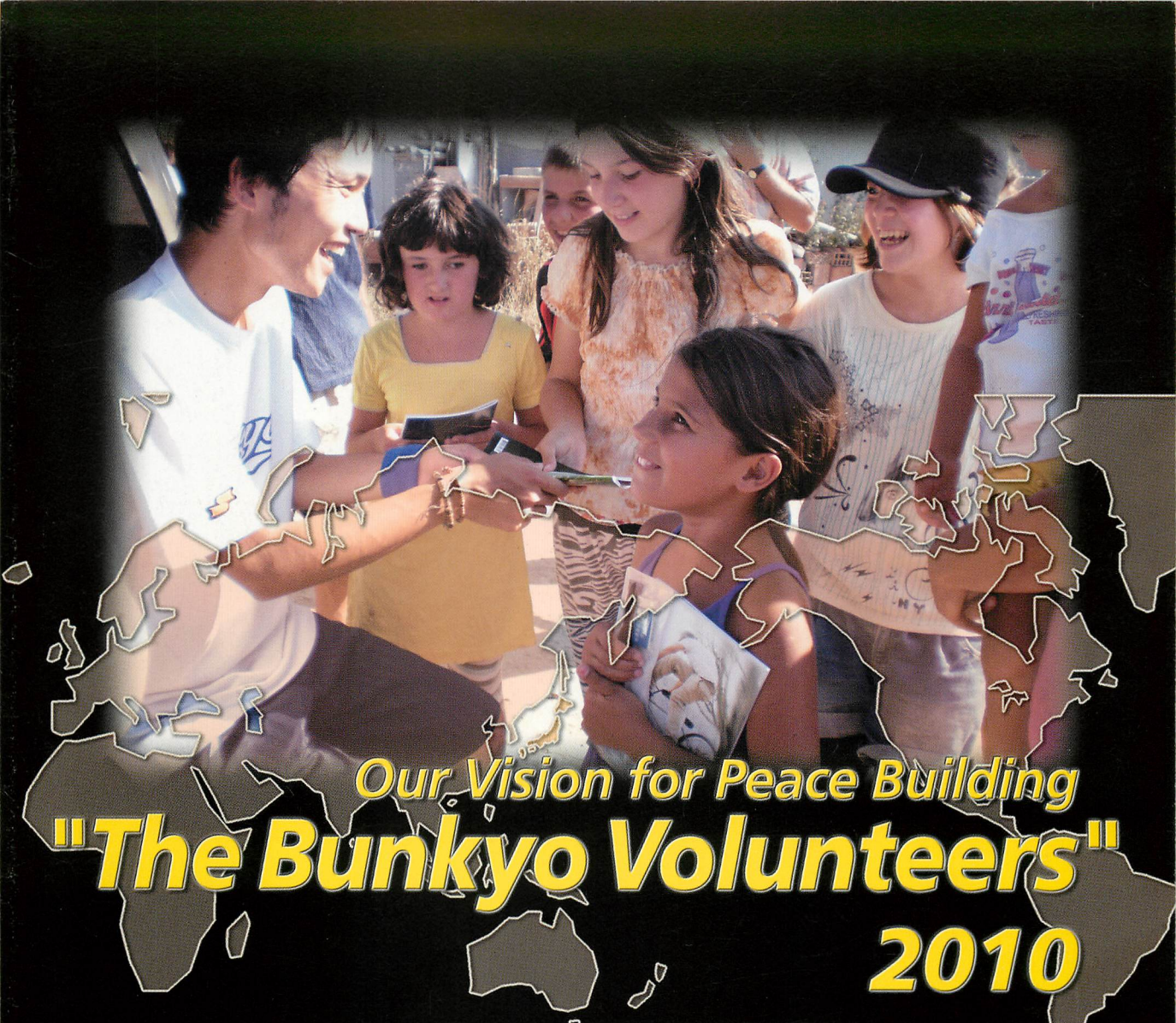


Our Vision for Peace Building

"The Bunkyo Volunteers" 2010

コソボ共和国
Republic of Kosovo

ウガンダ共和国
Republic of Uganda

ボリビア多民族国
Plurinational State of Bolivia

アメリカ合衆国〈ニューヨーク〉
United States of America / New York

中華人民共和国〈雲南省〉
People's Republic of China / Yunnan

文教大学国際学部 20周年記念

Republic of Kosovo

文教ボランティアズ　コソボ大統領と会見

文教ボランティアズ

コソボ大統領と会見（2010年8月26日）

国際学部で国際協力活動を実践している文教ボランティアズの学生が8月26日、コソボの首都プリスティナで、ファティミール・セイデュー大統領と会見した（写真）。同席したのは、3年生4人（樋惇紀、石川結麻、犬飼香奈、内田萌奈美）、2年生2人（佐藤夕夏、蟻坂舞）の計6人と指導に当たっている同学部国際ボランティア委員会の中村恭一、生田祐子の両教授。

会見日のちょうど1カ月前、雅子皇太子妃の父である小和田恒氏が所長を務める国際司法裁判所（総会、安保理等と並ぶ国連6大主要機関の一つ）が「コソボの独立宣言は国際法並びに関連の国連決議に反するものではない」との判断を下したばかり。近づく国連総会でもセルビアの提起により、コソボ独立問題が論議される見通しの中、コソボには連日EU（欧州連合）や関係諸国の外交幹部が訪れて、大統領も職務に忙殺されている最中での会見となった。

表敬訪問が可能かどうか日本出発時には不明だった。ところがコソボ到着の翌8月23日、在東京コソボ大使館のサミ・ウケリ大使から中村教授に「26日午前10時に大統領が官邸でお会いする」との電話が入った。

会見では大統領から、コソボ紛争後の日本の様々な復興協力やコソボ独立宣言直後の日本の承認（2008年3月）への感謝をはじめ、今年春アジアでは唯一の大使館を日本に開設したことに触れて、コソボにとって日本がいかに重要な友好国であるかを熱心に語られた。中村教授からは、日本もサンフランシスコ講和条約後国連加盟までには数年かかったこと、文教大学のコソボ復興協力活動が今年で10年目を迎えたこと、さらに今回はコソボの学生たちとの平和セミナーなどでの交流や小学校、紛争被災者家族への支援などのために訪問している事情が説明された。大統領はボランティア活動にも感謝と敬意を表明した後、「訪日の機会にはぜひ文教大学で学生たちと懇談したい」との希望を述べられた。

当初10分程度の表敬と見られていたが、会見は30分に及んだ。会見が行われた執務室横の控え室では、次の訪問団数人が待機していた。コラブ・セイデュー法律顧問（大統領と同姓は偶然）からは9月15日、「日本からの大事な訪問客への時間は最優先で調整する」とのメッセージと共に、上掲の写真（官邸公式カメラマン撮影）が送られてきた。

紛争終了後11年、独立宣言後2年のコソボは承認国が69カ国となり、今後承認国の増加と共に、国連加盟、EU加盟などが重要課題。世界銀行や国際通貨基金（IMF）には既に加盟しており、日本政府はコソボ政府内に開発アドバイザーとしてJICA専門家を送り込むなど、協力活動を推進している。

CONTENTS

Our Vision for Peace Building "The Bunkyo Volunteers"

コソボ大統領会見 …… 1

ボランティア活動

コソボ共和国 …… 4

ウガンダ共和国 …… 12

ボリビア他民族国 …… 16

アメリカ合衆国〈ニューヨーク〉 …… 18

中華人民共和国〈雲南省〉 …… 21

文教ボランティアズの活動 …… 24

コソボ共和国
Republic of Kosovo

Conditions of a country report

国情報

面積：10,908平方キロメートル（岐阜県に相当）

人口：215万人（2008年、コソボ統計局）

首都：プリシュティナ（人口60万人、推定）

民族：アルバニア人（92%）、セルビア人（5%）、トルコ人等諸民族（3%）

言語：アルバニア語、セルビア語等

宗教：イスラム教（主にアルバニア人）、セルビア正教（セルビア人）等

国民一人当たりGDP：1,759ユーロ（2008年、世銀推定）

コソボ国内地図

コソボ周辺地図

History

歴　史

コソボは12世紀末には中世セルビア王国・セルビア正教会の中心であった（それ故、今日でもセルビア人はコソボを聖地と見なしている）。しかし、14世紀末にオスマン・トルコに占領されて以来、多くのセルビア人が北方に移住し、一方で、イスラムに改宗したアルバニア系住民が大量に流入し、人口比は次第に逆転していった。

20世紀初めにセルビアがトルコからコソボを奪回し、第二次世界大戦後のユーゴスラビア社会主義連邦共和国（旧ユーゴ）では、セルビア共和国の自治州となったが、大幅な人口増を背景として1980年代、コソボに共和国の地位を求めるアルバニア系住民の暴動が繰り返され、少数派のセルビア系住民が抑圧を受けるようになった。そして、1989年ユーゴ・セルビア当局（ミロシェビッチ政権）がコソボの自治権の縮小を開始し、1990年にアルバニア系住民が住民投票を経て「コソボ共和国」を宣言した直後にコソボ州議会を解散すると共に、自治権をはく奪する等の弾圧を強めた。

その後、ルゴバ・コソボ民主同盟代表等が平和的手段によりコソボの独立運動を展開した

が、事態の進展はなく、1998年2月にアルバニア系のコソボ解放軍（KLA）とセルビア治安部隊との間に武力衝突が発生して以来、紛争が激化し、ユーゴ連邦軍も介入。国際社会の和平案をユーゴ政府が受け入れず、コソボにおける人道的惨事が発生する可能性が高まったとして、1999年3月、北大西洋条約機構（NATO）がユーゴ空爆を開始した。空爆開始後、セルビア治安部隊によるKLA掃討活動が強化され、多数のアルバニア系住民がマケドニア等近隣地域に難民として流出した。

1999年5月にG8外相間で合意された和平案を基に和平交渉が行われた結果、同年6月、国連安保理決議1244が採択され、武力紛争は終結した。その直後、多数のセルビア系と非アルバニア系住民がコソボからセルビアに避難民として流出した。

その後コソボにおいては、安保理決議1244に基づき、民主的な多民俗社会に基づく実質的自治を構築するために、民生部門を担当する国連コソボ暫定行政ミッション（UNMIK）と、軍事部門を担当する国際安全部隊（KFOR）の下で和平履行が進められた。2008年2月17日コソボ議会は「コソボ共和国」の独立を宣言し、2010年8月時点で国連加盟192ヶ国のうち日本を含む69ヶ国が独立を承認している。

Content of activity

コソボ・ボスニアでの活動内容

2010年8月22日～9月2日の11日間コソボやボスニア・ヘルツェゴビナに滞在した。

コソボでは、世界遺産である修道院やセルビア教会、紛争現場などの視察に加え、コソボ外務省職員やUnited Nations Kosovo Team（UNKT）の国連開発計画（UNDP）、国際女性開発基金（UNIFEM）、国連ボランティア計画（UNV）職員、またJICA専門員からブリーフィングを受け、さらにコソボ大統領に表敬訪問をさせていただき、また各地でコソボ紛争の傷跡を見聞すると同時に、現在のコソボにおける問題点や今後の課題について学ぶことができた。首都プリシュティナにあるUniversity of Business and Technology（UBT）で日本文化や学生生活、原爆についてのプレゼンテーションなどを通して、教員や学生たちとのセミナーを通して交流した。また、アメリカのNGO、Youth with a Missionの駐在代表である小野寺ふみさんの協力のもと、コンテナハウスを住居とするコロビッツァ村や農業で生計を立てるシュテティッツァ村、ペヤ地区のセルビア人地区の小学校を訪れ、日本での募金による支援のための資金や物資を届けると共に、現地の人々との交流を行った。

ボスニア・ヘルツェゴビナでは、大虐殺の起きたスレブレニッツァの平和公園やメモリアルセンターの見学、サラエボ市内では戦火の中での脱出トンネルや集団墓地の見学、駐ボスニア大使の表敬懇談を行い、ボスニア戦争の悲惨な過去を感じ取るとともに、ボスニアの抱える問題点等についても学ぶことができた。

コソボやボスニアで過ごした11日間で、本やインターネットだけでは決して学ぶことのできない多くの事を学び、戦後復興地の現状というものを身をもって体験することができた。

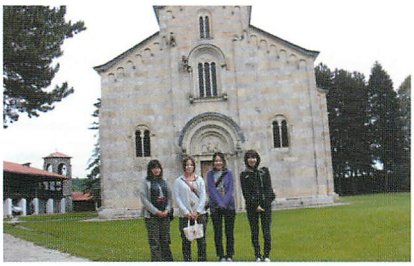
フリーマーケット

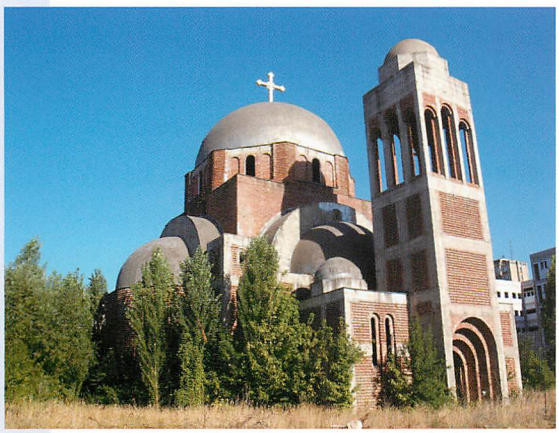
物資は学内で集め、手作りのシュシュなども売った。売り上げは現地での支援協力金に充てた。

首都プリスティナにあるプリスティナ大学図書館。周りが鉄格子で囲まれたユニークな設計は、知識と教養をセルビア側が管理している象徴とも見られた。

湘南台駅での募金活動

コソボへの支援を行うために、湘南台・茅ヶ崎駅において募金活動を行った。集めた募金は現地で活動するNGOに届けられた。





首都プリスティナにあるセルビア教会。アルバニア系住民が大多数の首都の中心部に強引に建設しようとしたセルビア権力の象徴として残る。紛争になり建設は中断された。

避難民の共同生活所

彼らが住んでいる生活所は暖房設備が十分ではないため、寒い冬をあたたかく過ごしてもらおうと、キルトを渡した。

ラチャク集団虐殺事件記念墓地

アルバニア系犠牲者が眠る墓地の前で、私たちが折りあげた千羽鶴を祈りを込めて供えた。アルバニア語で"平和を願って"という意味のメッセージとともに。

コソボ解放軍 アデミ・ヤシャーリー家の跡地

この家はセルビア警察に包囲され、40数人のアデミ・ヤシャーリーの一族が少女1人を除いて虐殺された。この事件は民族間の対立を深め、コソボ紛争を一層激化させる結果となった。

コソボ中央部の村にあるアデミ・ヤシャーリー一族の墓。50人近い一族がセルビア軍に殺害され、それがコソボ紛争の動機になったという。

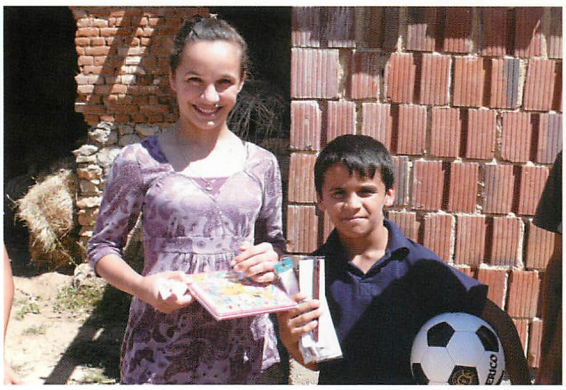
コソボ北部の町ミトロビッツァのイバル川にかかる橋。イバル川を境に北部がセルビア人地区、南部がアルバニア人地区に分断されている。橋は民族の架け橋となるように虹がデザインされている。

紛争中に犠牲になったアルバニア人のお墓。
10年たった今もまだ、資金不足で整備されていない。

今なおコンテナハウスで生活を続ける子どもたち。

コソボ中央部のドレニッツァ地方にあるステティッツァ村で未亡人支援を行った。皆、私たちを暖かく迎えてくれた。

紛争被災家族の子どもたちとバレーボールを通して交流。子どもたちと楽しい時間を過ごしたが、これが子どもたちの思い出と励みになるようにとの思いを込めた時間だった。



バレーボール、サッカーボールと文房具を子どもたちへ贈った。

楽しみの少ないコンテナハウスの子どもたちの大歓迎。

コソボの男の子たちは設備の要らないサッカーが何よりもの楽しみ。

アメリカNGOのYouth with a Missionに世界各地から届いた大量の衣類を、婦人服・成人男性服・子供服に分類し、農村に届ける準備活動を行った。

文教ボランティアズからコソボで活動するNGO代表の小野寺さんに、募金活動で集めた支援金を贈った。

支援物資をもらった女の子。みんなとても喜んでくれた。

支援物資の鉛筆やノートを心待ちに並ぶ子どもたち。

文房具、スポーツ用品などの支援物資の寄付
このセルビア人の村の小学校では、PC室や体育館、プールなどの設備も整っていた。校長先生は、子どもたちのことを考えているのがすごく伝わってきた。

ペア郊外のセルビア人村にある学校を支援のために訪問。校長から学校の教育システムや運営についての話を聞いた。

コソボの大学生と夜交流をし、意見交換。皆日本にとても興味を持ってくれた。

Dr. Neshad Asllaniが運営しているNGOのコソボ人権センターでの現地の学生との交流会。コソボ人権センターは、Dr. Asllaniが、コソボ紛争を体験した後に二度と悲惨な状況を招く事のない様に設立されたNGO。

経営技術大学(UBT)での交流の休憩時に、ボランティアズが合唱でもてなした。曲名"I have a dream"で、コソボの将来が明るいものとなるよう願いを込めて歌った。

ヨーロッパ水準を目指す経営技術大学(UBT)でのプレゼンテーション。広島・長崎の原爆、日本の学生生活について英語で発表した。このような機会は、互いにとって、とても意味のある良い機会となった。

コソボ政府外務省。コソボの現状、今後の課題について説明を受けた。

国連開発計画(UNDP)コソボ事務所で、日本人職員の方々によるブリーフィングを受けた。現地の状況や、UNDPの活動内容を直接聞くことができた貴重な機会だった。

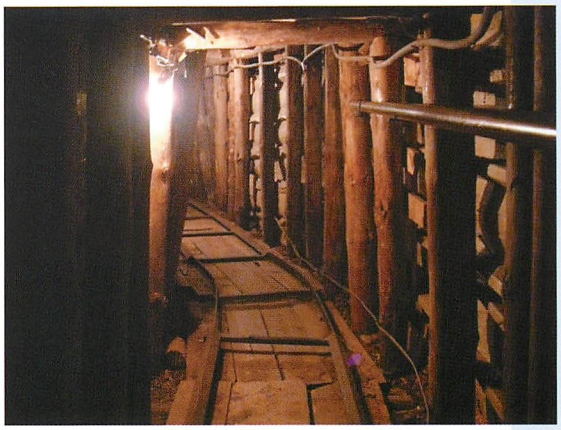
ボスニア・ヘルツェゴビナ
Bosnia and Herzegovina

ボスニア東部ポトチャリにある紛争記念平和公園。立ち並ぶ犠牲者の墓。1995年7月に起きたスレブレニッツァでの大虐殺の現場だ。殺害されるか、行方不明となった人々の一覧のモニュメントには、8,373名の名前が刻まれている。

ポトチャリの戦争記念館。当時はバッテリー工場であり、国連PKOのオランダ軍が基地にしていた場所。セルビア軍の攻撃を逃れて数千人が逃げ込んだが、多数の人が殺害された。数は少ないが、当時の写真や、亡くなった人々の遺品が展示されている。

一見、普通の民家のような建物だが、この建物地下にボスニア人がつくった手造りのトンネルがある。セルビア軍に包囲されたサラエボと郊外の農村との唯一の通行路となった。

サラエボの日本大使館を表敬訪問。ボスニアの現状、日本の役割について大使から直接お話を伺った。他の大使館幹部も同席、みなさんとても親切にしてくださった。



トンネル内部。
必要な日常物資が密かに運ばれた。

ウガンダ共和国
Republic of Uganda

Ugandan outline

ウガンダ概要

アフリカ東部に位置する共和制国家で、赤道直下の国のひとつである。言語は英語・スワヒリ語・ルガンダ語が主なもので、キリスト教6割・伝統宗教3割・イスラム教1割である。

［参照・外務省HP］

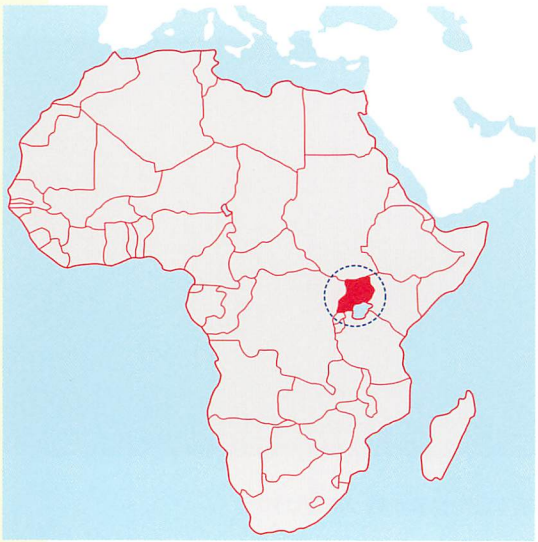
世界で2番目に大きなヴィクトリア湖があり、「アフリカの真珠」と形容される程に自然が豊かである。日本はこの湖から獲れるナイルパーチ（白スズキ）と呼ばれる魚やコーヒーなどを輸入し、ウガンダは日本から主に中古車を輸入している。1962年にイギリスから独立した後、度重なるクーデター・アミン元大統領による大虐殺・「神の抵抗軍」（LRA）による戦闘行為などから国内は混乱したが、現在は比較的落ち着いている。しかし、時折暴動が起きたり、ウガンダ北部でのLRAの活動による爪痕が今も人々を苦しめている。

Content of activity

活動内容

日本国際飢餓対策機構（JIFH）の企画した2009年8月14日～28日の日程で行われたワークキャンプにおいて、私達はアフリカ・ウガンダ南部のミソンバという地域で小学校の校舎建設の基礎工事のお手伝いをさせていただきました。私達が訪れた時に使われていた校舎は風化が進んでいて、今にも崩れてしまいそうな箇所がいくつもありました。そんな危険な校舎で、子ども達は勉強をし、風化で空いた壁の穴から

ウガンダ周辺地図



ウガンダ国内地図

顔を出したりはしゃぎ回ったりして遊んでいました。建設に使われた煉瓦は手作り、土やセメント・煉瓦を運ぶのもバケツリレーで、地域の人やお母さん・子ども達と一つになってワークを行うことができました。

ミソンバは首都カンパラから車で約1時間行ったところにあり、建物はコンクリートではなく手作りの煉瓦作りで、家と家の間隔は日本では考えられないほど遠く離れ、人々の生活の基盤である井戸は一つしかありませんでした。ワーク期間中にいくつかの家庭を訪問する機会があったのですが、その日の夕ご飯はサツマイモのみという家庭も中にはありました。また、ウガンダはHIVが多い国でもあり、ミソンバにもHIVに感染した親子や、両親をエイズで亡くした子ども達（HIV孤児）がたくさんいました。また、2008年「ウィッチドクター」という、日本でいう魔術師によって一人の子どもが殺害されたこともあったそうです。JIFHの現地スタッフからは北部ウガンダでのLRAの残虐非道な活動について教えていただきました。

しかし、そういった負の部分を感じさせない位、子ども達は毎日明るく接してくれ、まるでミソンバのコミュニティーの一員になったような錯覚さえありました。

↑歓迎会の様子

子供たちが伝統的なダンスを披露してくれた。軽快な太鼓の音に合わせて、子供たちは独特なリズムでステップを踏みダンスをする。そのダンスは力強く、アフリカを肌で感じたような思いがした。

↑ハゲコウ

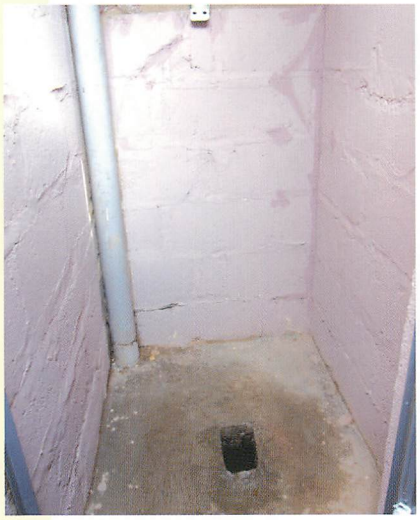
コウノトリの一種で体長約1.5m、翼を広げると3mにもなる。街の至るところを飛び回っている様子は迫力がある。

←学校の土台作り

何度も土を運んで外堀を埋めていく作業。子供たちや子供たちのお母さんも加わって地元の人たちと一緒に作業を進めた。

小ヤギと子供たち

自給自足のこの村にとってヤギのミルクは貴重な栄養源。ほかにも牛やウサギ、鶏、豚などが飼われていた。毎日子供たちが楽しそうに動物の世話をしていた。

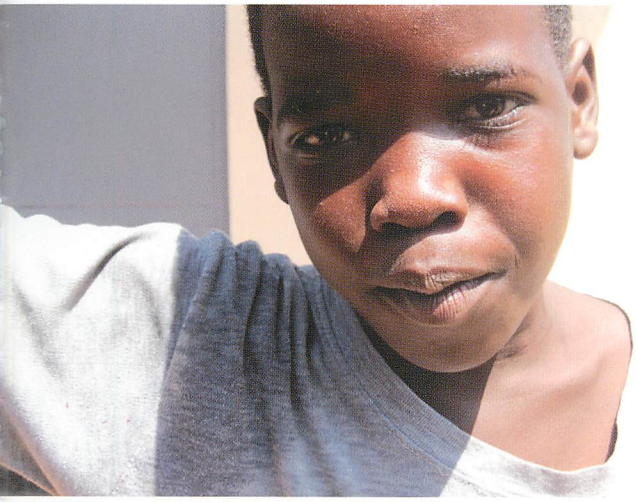


私たちが使っていた共同トイレ

コンクリートに穴が開いているだけの簡素なトイレで、このようなトイレは学校にも設置されていた。しかし自宅にトイレを持たない人が大半で、多くの人が屋外で用を足すという非衛生的な環境にある。

村で栽培されているコーヒー

自給自足の生活で、農業により生計を立てているこの村にとってコーヒーは貴重な換金作物。しかしこの村には大規模な農場はなく個人で育てている小規模なものなのであくまで“生活のたし”程度にしかなっていないのが現状。



学校にて

「将来の夢は?」と質問すると医者や教師という答えが多く返ってきた。しかし実際には多くの子供たちが経済的な理由で中学校にすら進むことができない。

キリスト教の教会

中は長机といすが置いてあるだけで、彫刻や絵画などの装飾は一切ない。しかし毎週たくさんの人がこの教会に訪れ歌ったり祈りをささげたりしている。

民族衣装

「ゴメス」と呼ばれる肩の尖ったワンピースドレスで婦人用。

村の人たち

村の人は親切でフレンドリー。道で会うと大人も子供も必ず「元気?」と声をかけてくれる。写真くらいの小さな子は道にひざをついて挨拶をする。これは年上に対しての敬意を表すためのこの国の伝統的な習慣。

ボリビア多民族国
Plurinational State of Bolivia

最近日本で流行りのアルパカも、ボリビアではいたるところで見ることができる。

Conditions of a country report

国情報

言語：スペイン語・ケチュア語・アイマラ語

宗教：カトリック教（国民の約95%以上）

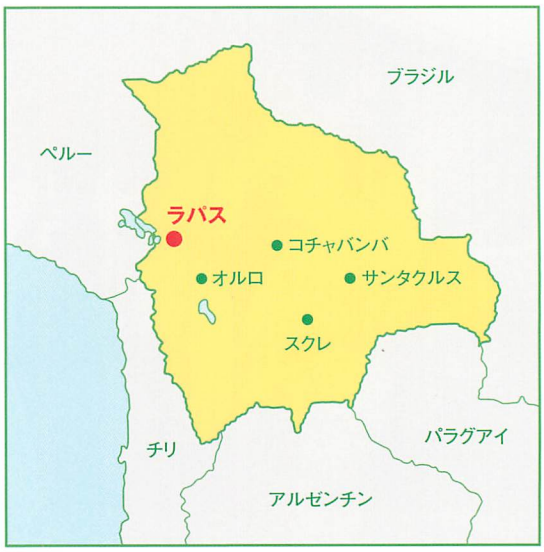
GDP：4.6%（2007年世銀）

ボリビアの首都ラパスは、世界で最も標高が高く3,650mもあります。

スペインから侵略を受けていたという歴史背景があるため公用語としてはスペイン語があり、また私たちが訪れたアンデス山脈の山奥で多く使われているケチュア語やアイマラ語も近年から公用語として認められています。国民の大多数がカトリック教なのも過去にスペイン支配を受けていたからです。

乾燥しているせいか、手を洗う習慣がなかったり、貧しい上に高地で食べられる食料が限られているため、どうしても栄養がかたよったりしているという現状なので、今後FHの活動では、衛生や栄養についての知識を身につけて、きちんと手を洗ったり、バランスの取れた食事を取れるようになることを目標としているそうです。また貧しくて学校に行けない子供たちの学習を支援することを目的とした世界里親会プロジェクトも行っています。

ボリビア国内地図



子供たちのおやつタイム。

歓迎のしるしに、大切なお祝い事でしかさばかない羊をさばいていただいた。

Content of activity

活動内容

ボリビアでの活動は、コチャバンバ県のチャヤ地方で様々なコミュニティーを訪れ、現地の方々とともに教会のイスやシャワー設備を作るという内容でした。言葉は通じないのですが、身振り手振りを使いなんとかコミュニケーションをとることもできました。もちろん高山病に慣れない我々は、現地の方々の足手まといにもなりました。しかし、皆さんは全く意に介さず、感謝のしるしとしてクリスマスや結婚式などの重要な行事でしかさばかない羊をさばいてくださいました。またFHが支援している小学校を訪れ、子どもたちと風船で遊んだり、学内を見学させていただいたりと、貴重な体験をさせていただきました。

椅子が完成した記念にボランティアメンバーと現地の方々と撮った一枚。

作業は現地の人々との共同作業でおこなった。

FHが支援している学校で子供たちに歌のプレゼントをした。子供たちからは大きな拍手をもらった

海外ボランティア活動パートナーNGO

日本国際飢餓対策機構

Japan International Food for Hungry
略してJIFH

日本国際飢餓対策機構（JIFH）は、非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年ひとりの日本人がインドシナ難民救援から帰国したのを契機に始まりました。

以来、国際飢餓対策機構（FHI）とパートナーとして活動する他、国際諸機関・民間諸団体などと協力し、アジア・アフリカ・中南米の開発途上にある国々で、「世界の飢えた人々に食糧と愛を」を標語に物心両面の飢餓対策にあたってきました。2006年はフィリピン・ウガンダ、2007年はフィリピン・ウガンダ・ボリビア、2008年は中国・ボリビア、2009年はウガンダ、ボリビア、2010年は中国ヘワーク・スタディキャンプに文教生が参加しました。

ニューヨーク
United States of America / New York

2007年から毎年、アメリカ合衆国ニューヨークの国連本部において国連研修と視察を行い、コロンビア大学日本語学科やNPO団体であるNY de volunteerの活動において、教育ボランティア活動を行った。

〈同時多発テロ現場跡地・グランドゼロ訪問〉

事件発生現場ではメモリアルタワーの建設が始まっていた。

テロ事件被害者に哀悼の意を込めた千羽鶴。文教ボランティアズの先輩たちが送り届けたものが、教会に飾ってある。

グランドゼロ跡地には新しいビルの建設工事中で、多くの観光者が訪れている。

アメリカ国内地図

同時多発テロで犠牲者たちの写真。この写真の枚数の多さがテロの悲惨さを物語る。

〈国連本部研修・視察〉

国連本部では、国連事務次長の赤阪清隆氏をはじめ、人間の安全保障ユニットの田瀬氏、広報局の植木氏、国際政治局の川端氏、通訳者のAlexandore氏、UNICEFでは市川氏から国連の現場での働きについて詳しく話を伺った。そこで学んだことのひとつは“人間の安全保障”についてである。“人間の安全保障”の概念は「恐怖から自由であること」「欠乏から自由であること」。このような心の安心は人々に活力を与え、人々が自らの国を作っていく上で非常に重要なものとなる。その心の安心の達成を手助けするのが国連の役割であり、またその達成には私たち市民の理解と協力が不可欠であるという話を伺った。さらに、国連本部内を視察し、実際の会議場を見学した。

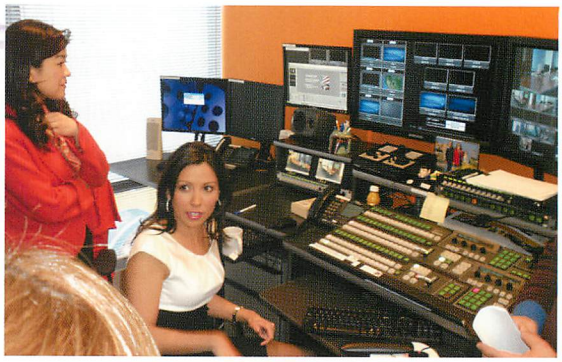
安全保障理事会会議場の見学。後ろの壁画は、灰から飛び立つ不死鳥が描かれており、第二次大戦からの世界の再建を表している。

3月8日が国際女性デーということで、世界各地から多くの女性のNGO職員等が集まり、会議が行われており、その様子を見学することができた。

国連の広報担当事務次長である赤阪清隆氏から、国連の役割や課題等についてのブリーフィングを受けた。

〈海外キャリアを開拓するためのワークショップ〉

ニューヨークの第一線で活躍されているロイター通信報道記者の我謝京子氏、NY de Volunteer（NPO）代表の日野紀子氏に話を伺った。さらに日野氏の活動に参加させて頂き、子供たちに日本文化を紹介するボランティアをした。英語を日常的に使用する世界の現場を実際に見て経験できたことは、自分たちの進路について真剣に考えるきっかけとなった。



ロイター通信内にある大きな編集装置。

ロイター通信の建物内を我謝さんに案内して頂いた。仕事の様子や、雰囲気などを感じ取ることができた。

我謝さんにロイター通信で働くまでの経緯等の話を伺った。自分のやりたい事を貫き通す強さを持つ女性だった。

〈コロンビア大学日本語学科訪問〉

コロンビア大学で日本語のクラスに参加し、日本語を教えながら学生たちと交流した。日本語を真剣に勉強している学生がたくさんいて、日本についての質問が熱心に飛び交った。

コロンビア大学日本語クラスの学生が歓迎会を行ってくれた。お互いの国について話す貴重な体験となった。

少数のグループに分かれて交流を行った。皆、日本にとても興味を持っていた。

雲南省

People's Republic of China / Yunnan

崖のような急斜面の細い道をジープであがっていった。その道端から撮影したチベット族の村。

Yunnan outline

雲南省概要

中華人民共和国の最西南部に位置する省で、雲南省の名前の由来は雲嶺という山地の南にあることに由来する。岩石が目立つ中国の中でも緑が多く、地形が複雑なこともあり気候も多様である。雲南省にしかいない中国の少数民族は15ほど存在するといわれている。

〈マオディン村〉

雲南省チベット自治区の標高3,000メートルにもなる高地での活動内容は、現地の子供を対象とした日本語教室や、着物の着付け教室、住民との交流などである。日本語教室では、子どもたちは1回の授業で簡単な挨拶等を覚えるまでになった。また、仕切りの無いトイレ、残すことが良いとされる食文化、ほぼ全て自給自足の生活等、多くの中国・チベット文化に触れ合い、多様な価値観、考え方を学んだ。

長江の上流にかかる橋を車で通過するところ。川によって雲南省と四川省に分かれている。

中国国内地図

最初に訪れたマオディン村で日本語教室に集まってくれたみんなと。

日本語教室に集まってくれたみんなと。

浴衣を着た子供達と記念撮影。

村でもてなしのために絞めてくれた鶏をスープにしていただいた。

まずは挨拶から。みんな真剣に取り組んでくれた。

挨拶と簡単な自己紹介の練習を。

私たちのために民族衣装を着て踊ってくれた。

一人ずつ順番に声に出して練習しているところ。

〈サーロン村〉

この村では中高校生との交流を中心に、日本語教室、マッサージや子どもたちと一緒に遊んだりした。交流の最終日には家庭訪問をしたお宅でチベットの伝統料理である「ババ」作りに挑戦した。歓迎会を開いてくれて歌や踊りを披露してもらい、私たちにも家族のように接してくれて温かい大家族の一員になれたような気がした。

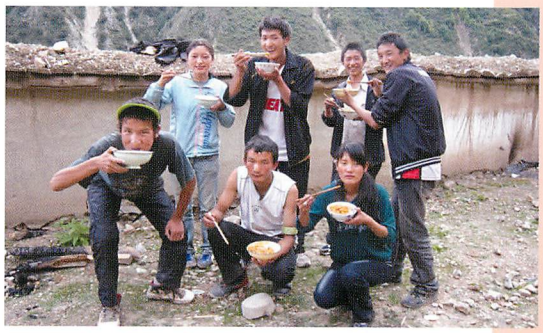
子ども達がチベット族の歌と踊りを披露してくれた。歌うことが好きな民族なのでみんないい歌声だった。

私の強い希望で撮ることができた一枚。サーロン村の中学生・高校生達と一部の小さい子達。私にとってとても大切な写真である。

サーロン村の食事はとてもおいしかった。手前は松茸のスープ。お肉はとても新鮮で、臭みも全くなかった。

サーロン村のリーダーであるピーター（英語名、左）と隣の南仁村のリーダーであるボブ（英語名、右）と一緒に撮った一枚。二人とも非常にしっかり者だった。

交流活動での1シーン。小さい子達は中学生・高校生の言う事をちゃんと聞いていた。



みんなでカレーを食べているところ。おいしいと言っていました。それにしても本当にみんな仲が良い。

文教ボランティアズの活動

文教ボランティアズ代表　樋　惇紀
（国際理解学科　3年）

1. 文教ボランティアズとは

文教ボランティアズは2001年に発足し、今年で10年目になります。国際学部の学生が、主に世界各地の紛争地での戦後復興の支援や日本のNGOや現地のNGOが行っている復興プロジェクトへの参加、孤児院などの恵まれない子供たちへの支援活動、難民支援、大地震の緊急募金活動などを行ってきました。直接現地に行き、「学生だからできること、自分たちにできること」を自分たちで見つけ、行うことを目標として、日々活動しています。今年2010年は、東欧に位置するコソボ共和国、中国の雲南省、国連本部のあるニューヨークで活動しました。

2. 文教ボランティアズの活動の意義

今年2010年に私たちが活動を行ったコソボは、日本ではあまり知られていない国の一つです。友人にコソボのことを聞いても、よく知らない人が多いです。私たちは、大学の授業等でコソボについて学び、自主的に本を読んだり、映像を見たりしながら、現地の理解に努めました。しかしそれだけでは十分ではありません。今回実際に現地で活動し、また戦争によって傷つけられた建物や教会等を見学することによって、初めて実際に起こったことを身近に感じ取ることができました。また現地の人々と交流することによって、人々が持つ戦争や他民族に対する憎しみにも触れる一方で、和解にむけて前向きな姿勢も実感しました。平和構築の難しさを感じるとともに、その必要性についても強く感じることができたのです。戦争を現実のものとして受け止め、この様な紛争を二度と繰り返してはいけないという平和への願いを皆で共有するとともに、国際平和のために尽くしていかなくてはならないという使命感をより強く抱くようになりました。ここに、実際に現地に行って活動を行う大きな意義があると思います。

しかし現地に行くということは、多くのお金がかかります。そのお金を現地のための支援金にまわしたほうがいいのでは?という声をたまに耳にします。しかし私たち学生の国際協力とは、ただお金を出すだけではなく、「具体的な協力体験を通して、お金での協力以上の何かを学ぶ」ことだと思います。現地で活動することによって、私たちが自分自身を高めることができて初めて、学生による国際協力の意味がより大きなものになると言えるのではないでしょうか。今回のコソボでの活動では、メンバーそれぞれが様々な思いや新たな価値観を創造することができ、人間としての成長につながりました。また遠い国の日本の学生が現地に行くということには、現地でしか発見できないものもあります。戦争によって傷ついている人々は、戦争はもう昔のことで、他の地域の人には関係のないことだと思われているのではないかという疎外感や不安を抱えている人が多くいます。私たちがその様な人々を訪れ、交流することで、人々の心を癒すことができるのです。現地の人々は私たちの訪問を心から喜んでくれました。

3. 今回のボランティア活動を通して

私たちの活動は多くの人に支えられていると実感しています。特に募金活動では本当に多くの市民の方が協力して下さいました。その都度、多くの市民も私たちを通して人の役に立ちたいと思

っていると実感し、私たちの心も豊かになりました。募金中に「暑いけど頑張ってね」「お疲れ様」などと励まして下さる方も多く、その励ましのおかげで厳しい天候の中でも長時間活動することができました。

現地に行くために、メンバーはアルバイトをはじめ、大学の授業、クラブ・サークル活動、そして現地活動の準備等に追われました。しかし皆が共に協力しながら、すべてを両立することができました。忙しく、厳しい思いをしてきた分、メンバーのボランティア活動に対する情熱も強くなったと思います。この間の日々はメンバーの大きな成長につながり、充実した学生生活を送ることができました。

4. 将来にむけて

文教ボランティアズでは、ボランティア活動を経験し、国際協力に携わる仕事をしている先輩方も多くおられます。その先輩方は、文教ボランティアズの活動が進路を決める大きなきっかけとなったとおっしゃっています。

私自身も、文教ボランティアズの活動によって、将来の目標が明確になりました。以前は「国際協力の現場で働きたい」と漠然と思っていましたが、活動を通して「UNESCO等の国際機関の一員として国際教育協力によって平和を築いていきたい」といっそう具体的に思うようになりました。元々教育の分野にも関心があったので、今回コソボで紛争や平和構築について学ぶ中で、恒久的な平和を作り上げていくためには教育の役割が非常に重要であると改めて実感しました。また春のニューヨーク研修では、国連本部や安全保障理事会等の見学を行い、国連職員から直接平和構築活動を始めとする国連の活動について話を聞きましたが、これも国際機関の一員として働きたいという気持ちを強くしたように思います。

最後に、私たちの活動は多くの方々の理解と協力のもとで成り立っています。一般市民の方々や国際ソロプチミスト茅ケ崎支部、市民活動サポートセンターの皆様のご支援のおかげで、私たちが充実した活動を毎年続けていくことができているように思います。また、ウガンダ、中国雲南省、ボリビアでの国際協力活動は、日本国際飢餓対策機構のご協力のもと、可能になりました。

ボランティアズを指導する中村恭一教授、生田祐子教授には、準備の段階から現地での調整など様々な面でご尽力いただきました。現地で協力して下さった国連やNGO職員の方々など皆様のおかげで、教室だけでは決して学ぶことができない分野についても、実践的な教育の機会を持つことができました。

私たちの活動を理解し協力して下さった大学の教職員や、両親をはじめとする家族にも感謝しています。おかげさまで、私たちが無事に安全に活動することができました。

私たちの活動に賛同し、協力して下さったすべての方々に心よりお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

◉ 2009年メンバー ◉	井上波留花	北澤　香奈	三田夏菜子	三井明日香	瀧田　枝末
	加治　孝幸	原　美紗	伏見　好	依田　志子	
◉ 2010年メンバー ◉	樋　惇紀	石川　結麻	犬飼　香奈	内田萌奈美	佐藤　夕夏
	蟻坂　舞	大木　孝太	近藤　恵太	中山　亜美	古澤　貴紀
	松舘　咲	安部　義博	豊田　真緒		

The Bunkyo Volunteers 2010

2010年10月16日 発行

編集・発行　文教大学国際学部・国際ボランティア委員会
〒253-8550　神奈川県茅ヶ崎市行谷1100番地
TEL：0467-53-2111

印刷・製本　株式会社 三和印刷社

Our Vision for Peace Building "The Bunkyo Volunteers"

URL http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/kokusai/

文教大学国際学部

Faculty of International Studies Bunkyo University

〒253-8550
神奈川県茅ヶ崎市行谷1100(湘南キャンパス)
TEL：0467-53-2111(代)